

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成29年10月17日（火）

午後1時～3時

【会場】浜松市総合産業展示館 北館1号ホール

1 出席者

- ・ 発言者 浜松市東区及び南区において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 120人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者1	防災	防災を通じた街づくり	2
2	高齢者福祉	高齢者にとっても住みやすい地域づくり	5
3	地域活動	中野町の伝統を次世代へ受け継ぐための活動	11
4	子育て	地域における子育て支援活動	15
5	農業	農産物の世界へのアピール	21
6	製造	楽器製造販売会社の社長として	25
傍聴者1	—	地域の偉人の顕彰化	32

【川勝知事】 皆様、こんにちは。今日は足元が悪い中、たくさん駆けつけてくださいます。誠にありがとうございます。

この「平太さんと語ろう」というのは広聴、広く聴くということでございまして、今日こちらに東区、並びに南区から3名ずつ地域の代表の方たちにお越しいただきまして、取り組みを聞くと同時に、もし何かお手伝いすることがあれば御一緒にその仕事を促進させていただくというそのつもりで参っております。

知事広聴もこれで、私自身が知事になって9年目ですけれども、50回を越えました。そして今知事室がどこにあるかといいますと、浜松市の中に置いてあるんです。昨日からもう浜松に入っております、知事室はもちろん公式の知事室というのは静岡市のど真ん中にあるんですけれども、知事の仕事というのは、皆様方の生活であるとか、産業であるとか、もちろん防災のこととか、生活に関わることを問題があればそれを解決するし、いいことは多くの方々にそれを知らせるということで、現場にあるわけですね。

生活に密着する事柄につきまして、1つでも2つでもいい方向にいければということで、今日は6人の方々のお話をしっかり承りながら、来てよかった、この会が2時間持ててよかったというふうな会になりますように御期待申し上げまして冒頭の挨拶といたします。長い時間ですけれども、どうぞよろしくお付き合いくださいませ。ありがとうございました。

【発言者1】 皆様こんにちは。御紹介いただきました積志かがやきカフェの発言者1と申します。よろしくお願いたします。

どうして1番になったかという年の順じゃないかなと、今改めて思いました。時間も限られておりますので、私、積志かがやきカフェというのは、防災とまちづくりをテーマにつくったNPOでございます。防災活動に関わっている者として、その観点から次の2点を御提案させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

まず1点目は、受援力を高めること、そのために顔の見える関係づくりをすることについて。2点目は、共存とすみ分けについてでございます。

まず1点目の受援力を高めること、そのために顔の見える関係づくりをすることについてですが、積志かがやきカフェは本年度3年目になります。カフェというと、何となく喫茶店経営かなと思いますが、そうではありません。カフェというのは、交流とか、活動の

場とか、活動するということでございます。

この設立のきっかけは、実は子供たちが私にくれました。私は最後の年を積志小学校で過ごしました。そしてそのときにあの3.11の東日本大震災がありました。子供たちが被災した子供たちに何か自分ができることをしたいというのがあって、千羽鶴を14束つくりました。その14束を浜松市の支援市である大船渡の教育委員会に送らせていただきました。

その結果、大船渡小学校というところに、その千羽鶴が届きました。そして次の年の3月に大船渡小学校の校長先生から、卒業式に際してメッセージをいただきました。そのことがきっかけで大船渡との交流の絆が生まれました。交流してみて、初めて知ったこともたくさんありました。改めて私は今から申し上げるこの受援力というのが大切だなということを知りました。

皆さんは浜松市の職員の方々が、今もなお6年たっても出向をして大船渡市にいらっしゃることを御存じでしょうか。退職後、私はこのまま終わらせてはいけないのではないかなと思って、地元の有志の皆さんと防災とまちづくりをテーマに、東日本大震災後の東北支援、特に大船渡市とそして積志地区を拠点として、この受援力を高めて、住民の防災意識の向上を図ることを目標に活動しております。

この受援力とは、支援を受ける力ですが、ボランティアを地域で受け入れる環境や知恵のことです。東日本大震災では、たくさんの方がボランティアに来ていただいたと思うんですが、なかなかその受ける側がいろいろな組織とか、皆さんの横の連携ができていなくて、せっかく来てくれたボランティアがうまく機能しなかったということを知りました。

この受援力というのを私は自分のこのNPO、皆さんで立ち上げたNPOの大きなテーマにすることにしました。災害発生時、防災ボランティアの支援を生かすためには、被災地側がボランティアの支援に上手に寄り添う受援力が本当に重要だと思うからです。そしてこの受援力は、今は防災のことだけではなく、いろいろな場でまさにボランティアを受け入れる側の力としてできているというふうに思っております。

防災ボランティアの支援を受け入れ、地域の受援力を高めるための環境づくりには、防災マップづくり、防災訓練、いろいろな防災訓練に参加することなどが挙げられますが、私は人と人とのつながりを築くこと、これがとても大切だというふうに思います。それがまさしく顔の見える関係づくりではないかなというふうに思っています。

私たちは防災カフェというのをやっております。防災イベントも折々にしております。自治会が開く防災訓練、避難訓練は、何となくやらされている感、何か仕方なく行かなき

やいけない感があるような気がしますが、私はそうではなくて、自分の命を自分で守るんだという意識の中で、進んで取り組む、そして自分のための楽しみの防災活動にしていかななくてはならないなというふうに感じたので、みんなと一緒に今3年目を迎えております。

そこで大事なことは、昔から言われていますけれども、向こう三軒両隣という言葉があります。顔がわかり、声を掛け合い、言葉を交わし合う人間関係、地域づくりが必要です。今年から私のところはマチネコンサートというのを始めました。地元にあるお寺、皆さんがよく行く公会堂でお話や演奏会を開き、日ごろあまり外に出てこられない高齢者の方々にたくさん来ていただいて、いい語らいと出会いの場をつくっております。そんな場がたくさんできるといいなと今本当に実感しております。

2点目は、共存とすみ分けについてです。行政は何もしてくれない、またそれは市や区のやることだというようなことを考えたことはないでしょうか。正直私もあります。そう言いたくなるわけですがけれども、行政は住民サービスの向上に進んで取り組んでいただいております。が、しかし私はやっぱり自分も行政にいたことがあるので、よくわかるんですけれども、すべての人が満足するほど万全でも完璧でもありません。と、すみません、声を大にして言ってしまいましたが、よかったですでしょうか。

行政の多くの事業は、私はよりよい市民活動の入り口の扉を開けてくれる、そういう役割のような気がしています。行政と市民団体等のつながりはできてきましたが、これからは今以上に、行政に頼るだけではなくて、民間や市民団体、そして私たちのようなNPO法人の共存とか、連携、事業によってはすみ分けが必要なのではないかなというふうに思っております。

一例ですが、東区は今年、先ほど区長さんにもお伺いしましたけれども、家庭向けに新しく防災のリーフレットをお作りになっていると伺いました。私も試作ぐらいのときにちょっとだけ見せていただいたんですが、すぐにぱっと開けて、ポケットに入るぐらいの大ききで、とてもよくできています。それを各戸にお配りになるということでした。

実は私のところもそういう防災の冊子を考えていました。いや、これはどうしようというふうに思ったのですが、私のところは高齢者の方とか、障害者の方たちに手助けができればいいなという冊子をつくりたいというふうに思って、今作っております。それが実はこれです。

私は「いざという時のために防災お役立ち日めくりカレンダー」という名前で作りました。まさにこれも今試作段階ですので、これからつくっていくわけですがけれども、同じ

防災のリーフレットでも、やはり行政がやるべきことと、私たちのようなNPOがやるべきことは、やはりそこにすみ分けていくべきものがあるのではないかなというふうに思います。

私のところは残念ながらお金がないので、積志地区の75歳以上の高齢者の方たちだけにしかお分けできないんですけれども、それでも私は共存しながらすみ分けていくということが、私たちのようなNPOが行政とうまくやっていくことだというふうに思います。

時にはうちのような本当に小さいNPOに、行政の方たちからお声をかけていただいて加えていただくこともあります。これからは一層、本当にお互いの持つよさを共有し合い、できないところを補完し合う役割分担、持ちつ持たれつ、つかず離れずの関係のすみ分けと共存がやっぱり必要なのではないかなというふうに思っております。

最後になりますが、やっぱり自分の命は自分で守る。そのためには先ほど私が皆さんに訴えた受援力を高める。そして日ごろの防災意識を高めていく。そして顔の見える関係づくりをしていく。防災はもちろんですけれども、まさに隣同士がつながって、つながって、そして1つの大きな組織をつくって、皆さんにとっていい防災の意識が高まったらというふうに思っております。御清聴ありがとうございました。

【発言者2】 皆さん、こんにちは。高齢者相談センター新津の発言者2です。今日はセンターの宣伝にもなるということで、制服で参加させていただいて、ちょっと1人だけすごい色が浮いているんですが、いつもこの水色のジャージを着て、仕事をさせていただいています。

今回このような場への参加に声をかけていただいたんですが、私自身、まだまだ力不足を感じながらの仕事をしていまして、何をお話ししてよいのか困ってしまいました。せっかく多くの方にお話を聞いていただける機会ということなので、まずは高齢者相談センターの紹介をさせていただけたらと思います。

高齢者相談センターは、正式には地域包括支援センターといいます。浜松市の場合わかりやすい名前をとということで、数年前に愛称をつけようということで、高齢者相談センターと名乗るようになりました。ここでちょっとすみません、皆さんに質問させていただきたいんですが、高齢者相談センターとか、包括支援センターって知っているよとか、聞いたことあるよという方はどれくらいいらっしゃいますかね。ありがとうございます、こんなたくさんいらっしゃるとは。

私たち地域包括支援センターは、簡単に言ってしまえば、地域に住む高齢者、65歳以上の方の何でも相談窓口です。浜松市から委託された機関で、市内に22カ所あります。それぞれに担当地区があり、私の所属する高齢者相談センター新津は、南区の新津地区と可美地区を担当しています。

何でも相談ということなので、本当にいろいろな相談が来ます。介護のこと、健康のこと、生活のこと、お金のことや高齢者団体の相談も来ることがあります。一番多いのは、やはり介護の相談かなと思います。事務所には保健師や看護師といった医療の資格を持った専門職と、市民介護支援専門員、市民ケアマネージャーという介護保険の専門職、そして私の持っている資格である福祉全般の知識を勉強した社会福祉士の3職種が協力しながら、いろいろな相談事に対応しています。

私が地域包括支援センターに配属されたのは、福祉系の大学を卒業して、今勤めている医療法人社団和恵会に入社して3カ月ほどたったときです。当時は本当に力不足、知識不足、経験不足、もうないない尽くしで、周りのベテラン職員に助けられながら仕事をしていました。その法人内の介護保険の入所施設の相談員を経験して、また同じ地域包括支援センターに戻ってきて、現在で3年たったかなというくらいです。年数を数えるのが大変になってきたくらいには長くいる方です。

地域包括支援センターは、高齢者が住み慣れた地域で安心して生活できるように、できるだけ地域で長く生活できるようにを目的に活動しています。入ってくる相談には、ハードというか、重い相談もありますし、複雑で、包括センターだけでは到底対応しきれないケースもあります。

例えば高齢者だけでなく、障害を持った御家族もいて、複数に課題のあるケースというのがあるんですが、その場合、高齢者担当の包括センターだけでは解決ができません。障害のある方の相談を受ける専門機関というものもあるので、その機関の方と一緒に対応したり、そもそも私たちのような公的な機関とかサービスだけでは、その御家族の地域での生活を支えるということは難しいので、民生委員さんや、地域住民の方のお力も借りて、チームを作って支援していきます。困っているだろう高齢者の方御本人の、何とかしたいな、こうしたいなという希望をいろんな方の力を借りて、つなげてかなえるお手伝いをさせてもらうという感じでしょうか。

このような個別ケースの対応だけではなくて、地域に出かけていき、いろいろとお話しさせていただくこともしています。元気な高齢者に向けて、介護予防のお話などをさせて

もらうことが多いですが、ここ数年、力を入れているものに、認知症サポーター養成講座というものがあります。地域の方に認知症について正しく理解していただくための講座で、受講者の方には、今日ちょっと忘れてしまったんですけども、オレンジ色のリングが配られています。

今までに金融機関や企業からも依頼をいただきましたが、去年はある地区の民生委員さんたちの協力をいただいて、地域の自治会館で一般住民に向けて開催をさせていただきました。そのとき受講いただいたのは、比較的高齢でお元気な方が多かったのですが、やはり高齢になって介護が必要になっても住みやすい地域をつくるには、いろんな世代の方の力が必要です。包括支援センターの知名度もまだまだ低いなと感じていますので、今後は介護に接点のない世代の方たちへ、どのようにPRしていくかということが課題と考えています。

私はまだまだ力不足ですが、同僚の力、関係機関や介護の事業所の方たちの力、相談をいただいた高齢者御本人や御家族様の力、そして地域の方たちの力を合わせて、個別のケースや、地域での困り事に当たっています。今後も私自身の自己研鑽を重ねてスキルを上げながら、地域の方たちと高齢になっても住みやすい地域を目指していきたいと思います。

皆さんの地域にも担当の包括支援センターがありますので、困り事ができたときにはぜひ利用していただき、そして地域のためにお力を貸していただけたらと思います。貴重なお時間どうもありがとうございました。

【川勝知事】 どうも発言者1さん、発言者2さん、ありがとうございました。

それぞれ東区と南区のすばらしい女性のお話を聞きまして、まずは発言者1の方から、こちらの積志小学校の校長先生をされたときに、偶々あの悲劇が起こりまして、そして大船渡と交流が始まったと。これがまだ続いているということですが、あれは平成23年ですから、もう丸6年以上たちまして、それは大変御立派なことだと思います。

私ども県は岩手県を支援するというふうに全国知事会から言われまして、20人近くまで技術者を中心に人を送っておりまして、一貫して困っている人たちを助けるということをしているわけですが、今日発言者1さんの方からは、援助を受ける力というのがとても大切だと。援助をするというのは、これは当然のことかもしれませんが、一方で援助を受けるということもなかなかこれは大変だと。

実はこういう小さな町や市だけでなく、あるいは県だけでなく、国もそうで、初め

て日本があれだけの人たちが命を亡くしたり、あるいは行方不明になった2万人以上の人たちで、それで外国からたくさんの支援が来たんですが、アメリカは友だち作戦を展開したんですけれども、それを受け入れるのに1週間かかったんですね。ですからアメリカの海兵隊の偉い人は、もう1日でも早く決定してくれれば、1人でも2人でも命を救えたのと言われておりました。

ですから、我々はボランティア、あるいは人ごととして見るのではなくて、常に相手と一緒に助け合いながらやっていくということですが、いつ、何時、我々が助けてもらわなくちゃならないことになるかもしれないと、そういうことを考えましょうというふうにして、このカフェを立ち上げられたということですね。

ですから、そのためにはコミュニティをつくって、顔と顔の見える関係をつくっておかなくちゃいけないし、いざというときには自助共助公助というように、まず自らを助ける、次に地域の人たちが一緒に助け合う共助、それから公的機関の援助が来ます。しかし、来たときに受け入れる力というのがないと、例えば我々は遠野というところに拠点を定めて、これは花巻というところから東に50キロのところにあります。それから東に釜石がありまして、その上に大槌町とか山田町とかという、もう全部流されたようなところがあるわけですが、遠野にボランティアの人が来たいと言ったわけです。ところがボランティアの人でも生活しなきゃいけないんですね。そこで水も必要、それから食べ物も、それから宿舎も必要と。それを用意するのに1、2カ月かかったんです。

ですから受援力を持っているということは、援助を受ける力を持っているということは、即受けられることにもなりますので、多くの人を助けることができるということですね。ですからこれは改めて、我々は助ける力を皆持っています。そのときに助けを受けるといふそういうシステムづくりというものは、今、小学校の校長先生ですから、もう立派なことを言われて、これは偉いなと思って聞いておったんですけれども、ちなみにカフェというのは単にお茶を飲むところじゃないとおっしゃったのは、そのとおりなんですよ。

もともとコーヒーというのは、アラビアでも出たわけですね。それがイギリスに伝わります。17世紀のことです。そしてコーヒーハウスというのができ上がりまして、アラビアですから男しか行かないんですね、外には出ないと。ですからコーヒークラブはイギリスにできたときには男しか行かなくなって、そこでいろんな交流がなされて、やがてイギリスのオクスフォードのクラブだとか、ケンブリッジのクラブだとか、紳士のクラブがあります。男だけの社会です。

男だけの社会はよろしくないというので女性が立ち上がりまして、女が入れないということで、コーヒークラブが今のクラブに形を変えて、いわゆるイギリスはティー社会になっていくわけです。ですからそのカフェというのは、元々そういう交流の場として展開したところなんですね。しかし、もう何といたしても、積志におきましては、これは女性のクラブということですね。さすがに大和撫子の国だなと思って感心したと、こういうわけでございます。

それから発言者2さん、皆さん、地域包括支援のセンター、高齢者の相談センター、ほとんどの方が御存じだということで、こういうしっかりとした、しかも正直な若い女性がいらして、高齢者の力になっておられると同時にいろいろ学ぶところもあるとおっしゃっていただいているので、老壮青一体になっているなどということを感じた次第ですけれども、皆様、高齢者といたしますけれども、高齢者って幾つからでしょうか。これは65歳からということになっているんですよ。これだれが決めたんでしょうか。

私の目の前に東区長さんと南区長さんがいらっしゃるんですけども、60で引退で、あとは年金で生活するのかと思って、これは年金の無駄遣いじゃないかと思って、それぐらい元気なわけですね。ちなみに恐らく校長先生も定年で御退職されたので、それなりの御年齢だと存じますけれども、しかしこういうボランティアの活動をされていると。皆元気なわけですね。

ですから高齢者が65歳というのはおかしい。だれが決めたんだ。厚生労働省が決めた。厚生労働省は何を基準に決めたのかといたら、世界保健機構の決定だと。世界保健機構WHOというのがあります。これが1956年に決めたそうです。昭和31年のことです。したがって、昭和31年だと南区長さんも東区長さんも生まれていましたか。まだ生まれてないんですよ。そのころ決まったんですよ。そのころの日本の平均寿命が65ぐらいだったわけですから。だから厚労省もそれを引き受けまして、65をもって、つまり平均寿命がそのぐらいだから、それで高齢者にしようということになったわけです。

ところが今平均寿命はどれくらいでしょう。日本は世界一です。男女ともに80以上なわけです。だから80以上をもって高齢者にしなくちゃいけないんですよ。基本的に間違っているわけです。60年前ですよ。まだ東区長さんも南区長さんも生まれてないわけですけども、私は生まれていました。

それで、じゃ現実に応じた形での人生区分って皆さん御存じですか。少年、青年、壮年となっていく。少年は17歳までです。18歳から、今回選挙やっていますけれども、選

挙権をもらえると。青年はいつで終わるんでしょうか。青年会議所の資格は40歳以下ですから、これは世界JICで決まっていますね。しかし静岡県あたりだと商工会議所の青年部というのがあります。青年部は大体45歳以下ですね。これはどこにも決まっていませんけれども、50歳以下のところもあります、一番多いのが45歳以下をもって青年部にしていると。だから45歳以下は青年ということになります。

今度青年から壮年になるのが46からです。じゃいつ壮年は切れるのかというと、これは健康寿命が終わるところですね。つまりぴんぴんしている、全然生活に支障を来さない、これが健康寿命です。健康寿命が世界で一番高いのはどこでしょう。言うまでもなく日本です。日本の中で一番高いのはどこでしょう。言うまでもなく静岡県です。その中で一番高いのはどこでしょう。浜松じゃないでしょうか。

ですから、そうすると静岡県における健康寿命というのは、女性ですと76歳です。だから76までは壮年なわけですね。46から76までは壮年で、その壮年は30年ありますので、3段階ぐらいに分けよう。壮年前期が46から55ですね。壮年の一番盛んなる時期ですね、これが56から65までです。だから東区長さんも南区長さんも、皆さんこの人たちが区長なので、しっかり覚えてもらうために、南区と東区の場合は政令指定都市ですから、全部南区長、東区長両氏に任せようと思って言っているわけですが、この方たちも壮年なんですね。壮年中期というか、壮年の盛期なんです。66から76までは壮年の熟する期、熟期になるわけです。私は壮年熟期なんです。まだ壮年なわけです。

それで70歳になると、昔は古希と言いました。古来稀で古稀。ところが稀じゃないんですよ。もうありふれているわけです。だから古稀は静岡県の人生区分からは御退場願うというわけで、77になると喜寿といいますね。これはすばらしい。ですから喜寿になると、自分自身も労り、そして皆さんに祝っていただいて、余りもう無理はしない。無理はしないで自分自身のことを大切にすることが実は人に迷惑をかけなくなるということでございまして、そこから初老に入ります。

80の傘寿を迎えますと、これが中老になっていきます。88の米寿、90の卒寿、これから長老になっていくんですよ。つまり静岡県では後期高齢者というのはいないんですよ。初老、中老、長老になっていく。つまりだんだん偉くなっていくんですね。そういうことで、高齢者相談センターといっていますけれども、長老からいろいろとお知恵を借りるセンターというふうに名前を変えてもらいたいなど。

ただ、まだこの人生区分、実は中国の人にちょっと言ったら、これ中国語に訳してくれ

と。韓国の人に言ったら、韓国も薬膳などがあって、すごく健康に熱心なんです。韓国語にも訳される。アメリカ語にも訳せられます。英語にも訳せられます。だからこれ今は静岡発の人生訓、これが理想だと。

健康で長生きしたいということで、しかし、にもかかわらずやっぱり体が弱っていきますので、そのときには病院、あるいは民生委員の方たちですね、いろんなことでお役に立ってくださっています。そういうところとの連携とかをしていかないと、この相談センターは立ちゆかなくなることは間違いありません。ですから地域の連携が必要であります。その意味で地域包括支援なんですね。

そういうことで、一番支援が必要とされるのは、子供を除けば、障害者であるとか、それからいわゆる長老の方たちも、体には大事にしてもらわないといけない、判断力はだんだん成熟しています。ただ、認知症というのも一方でありますから、認知症にならないためにどうしたらいいかという啓発活動も静岡県ではもうとても盛んですから、そういうことについて、気がついたら相談をして、どういうふうにすると認知症と一緒に生活できるか、あるいは認知症が進行しないようにできるかということも、あわせて我々は考えていくということですね。

今ちょっとお二人の話に補足をする形になりましたが、とにかくこのNPOのようなボランティア組織があって、受援力を高めて、人の絆の関係をつくり上げて、そして同じように制度の中にあります相談センターというものもあって、これからみんなが共生をして、それぞれの役割の中でみんなが幸せになるように、いざとなったときにはこういうコミュニティの形成が受援力を高めて、災害を最小限に抑えられるというふうになっていけると、さすが浜松というふうに思った次第でございます。どうもありがとうございました。

【発言者3】 中野町を考える会の発言者3といたします。よろしくをお願いします。

私のところは、一言で言うとまちづくり、地域づくりの活動をしています。今日お越しのほかの方々に対して、何かミッションというか、明確な目的があったり、今お話しただいた福祉だとか、防災だとか、特別な目的があって、そのために活動しているのと少し違って、本当に地域のことを自分たちで考えながら地域づくりをしようというそんな活動をしています。ですから、活動の内容が割ととりとめもないというか、非常に多岐にわたるので、今日はレジメというか、ペーパーを1枚用意をしました。それを見ていただきながら、少しイメージを膨らませていただいてお話を聞いていただければと思います。

東区の中野町というところで中野町を考える会という活動をしています。地元の方は中野町という地名は御存じいただけているかと思いますが、中野町知らないよという方がいらっしやったら、ちょっと手を挙げていただいでよろしいですか。

一言だけ町のことをお話しさせていただくと、国道1号の天竜川橋の浜松側のたもとがまさに中野町になります。ですから、浜松市の中では東の一番端っこ、天竜川橋のところから高速の取付道路の少し手前ぐらいが中野町の町の範囲になります。

ペーパーのところにも書きましたけれども、中野町という町の名前の由来がすごく中野町をはっきりあらわしているんですが、江戸と京都のちょうど真ん中、『東海道中膝栗毛』の中にも紹介をされているんですが、「江戸へも六十里、京へも六十里、ふりわけの処なれば中ノ町といへるよし」ということで、距離的にちょうど真ん中の場所だったそうです。

そんなところで、割と人の往来が多かったのと、それから天竜川と東海道が交差するところだったので、天竜川を使っているような物資が運ばれていくという物の流通と、東海道を通っているような人が行き交うという人の交通のちょうど交差点として江戸時代から栄えた町のようなようです。

近年になっては、明治の終わりから昭和の初めごろまで、天竜川を使った舟運というか、上流の方で採れた天竜材を運んできて、中野町で下ろして、東海道線でいろんなところに運ぶということで、流通基地として栄えました。天竜川の堤防沿いには19軒ぐらいの材木屋さんが並んで、そのころ一番この町が栄えたというふう聞いています。

近年はいろんな事情が変わりまして、ほかの町と同じように高齢化の問題だとか、空き地、空き家の問題だとか、いろんな地域の課題を抱えています。私たちが活動を始めたのは12年ぐらい前になるんですが、小さな町の中に大きな空き地があって、そこを何とかしたいねということで、自分たちで何ができるだろうかということで、地元の有志が集まって活動を始めました。今でも全く有志の団体なので、NPOだとか、きっちり組織の体をなしている団体ではないです。

そんな中で、先ほども言いました国道の工事が当時進行中で、今、天竜川に3つの橋がかかっているんですが、2つの橋の真ん中に3つ目の橋を架けている工事をちょうどしていました。そこにも集落があって、中野町で暮らしている方がいたんですが、そういう住宅だとか、商店を立ち退いて、そこに新しく道ができるというちょうどそういう時でした。

道ができるのは、僕たちがどうこう言うことはできないけれども、せっかくきれいな道

が整備されるなら、その周りは地元が思うような形で整備していただきたいということで、最初の僕たちが考えた活動は、国道に絡んだ、いろんな地元でできることを地元でやらせてくださいということが一番最初に投げかけたのが、ペーパーの中にあるヒマワリの絵がついたところになります。

今でも皆さん通るとわかると思うんですが、国道1号の中野町インターというインターチェンジがありまして、その両脇の、もともと余剰地というか、空地になるところをぜひ花壇をつくらせてくださいということでお願いをして、そこに立派な花壇の場所の提供をしていただきました。管理は自分たちで管理をしていて、ヒマワリと、それから秋はコスモス、それから春には菜の花を自分たちで植えて管理をしています。

国道の整備に絡んで、3つの広場を整備してもらったんですが、一番端のところにウェルカム公園というか、たくさん歩いてみえる方が多いので、本当に東の玄関口となるような公園の整備をしていただきたいということを書いて、国交省が窓口になってお願いをしました。その公園と、今ヒマワリの花壇のところと、中ノ町小学校というもう少し西へ行くところにあるんですが、小学校の前にも少し空地ができるということで、そこは桜の木を植えた中野町夢いっぱい広場という広場をつくりました。

それぞれが町のためにもなるし、国道を行き交う人の目を楽しませてくれるような、そんな場所になって、しかも市の東の玄関口となるような、そんな表情をとということでお願いをしました。結構時間がかかって、足かけ5年ぐらいかけて、ぴっちり地元の意見を、当時国と県と市の方と、それぞれがそれぞれの役割の中で話を聞いていただいて、何とか思いどおりのものができ上がりました。

今、私たちが一生懸命管理をしています。管理の上で少し問題があるというか、いろんな課題があるんですが、それもその都度解決をしながら、何とかかんとか花壇の整備をしています。それは1つ困り事を少し解決できたかなというような事例になります。

もう1つは、伊豆石の蔵プロジェクトと書いてあるんですが、これが一番最近私たちが取り組んでいる活動です。その間にいろんな活動があって、変遷しながらこういう活動になったんですが、困り事の次に、せつかくそういう歴史がある町に自分たちが生まれて、そういうものの上に自分たちの暮らしがあるのなら、そういうのを少し掘り起こして、そういうものをまちづくりの中に生かしていきたいなということを考えました。

最初にやったのは、昔の町の古き良き時代の写真を集めようというところ辺から始めまして、それはペーパーの裏に書いてあるんですが、帆掛け船が天竜川を下っていくような

写真だとか、すごく町が豊かで、江戸時代の昔の暮らしを彷彿されるようなものがいっぱい出てきました。これは本当に町の宝だなと思って、それを右の看板に、今はもうあまり見ることがないんですが、せっかく昔のいいものが自分たちで掘り起こせたので、そういうものを町のいたる所に自分たちの手で看板をつくって掲げました。

天竜座という芝居小屋があったというお話を聞いて、その写真が残っていたので、天竜座の跡だというところで、そういうような看板でいろんな方に案内できるようになりました。それを使って、小学校の子どもたちに地域のことを学んでもらうような、そんな体験学習をしたりしています。

そんな中で、表の伊豆石の蔵のプロジェクトになるんですが、先ほど言った天竜川で材木を運んで、江戸に運んでいろんな生業になっていたんですが、そのときに天竜川の掛塚の港から江戸に材木を運んだ船が、帰りに伊豆に寄って、伊豆の石を積み込んで戻ってきて、この天竜川流域に広めていきました。中野町も材木屋さんがあって、材木屋さんの関係のところには、この伊豆の石を使ったお蔵がたくさん残っていました。町内だけで6つ残っていて、たまたまそのうちの1つを借り受けることができ、まちづくりの活動の拠点として使っています。

とても立派なお蔵で、コンサートやったら40~50人は何とか入れるようなものです。これ以外にも先ほど言った6つの蔵があって、これはとても中野町の生業だとかに関連をして、地域のこれまでの生い立ちを今にあらわしているものだということで、今年初めて浜松市で制定された浜松市の認定文化財というのに、この6つ全部認定をしていただきました。

持っている方もとても喜んでいて、自分の持っているお蔵が潰せなくて、持っていたものが宝だということでお墨付きをもらって、すごく皆さん愛着がわいている。その1つを使いながら、いろんな活動をしています。文芸大の学生さんに演劇のサークルで使っていたりだとか、落語家の寄席をやりましたり、地元で活動している方のギャラリーだとか、そんなことにも使っています。

そんな活動を通して、自分たちが元々持っていたものをうまく磨き上げて、次の世代に伝えていくというような、そんな活動に最近は少しシフトしてきています。特にだんだん人口が減っていくという中で、地域の担い手をこれから僕たちが育てていかなきゃいけないというふうに思っています。何百年と続いてきた中野町がこれから50年、100年続いていくように、僕たちも頑張って次の世代にまた残せるものを残していきたいというよう

な活動をしております。以上です。

【発言者4】 皆さん、こんにちは。私は可美地区のふれあいサマーフェスタ実行委員会、あと子育て支援である子育てサポートペあれんつの代表をさせていただきます。

本日はこのような光栄なところにお声をかけていただきましてありがとうございます。せっかくいただいた機会ですので、少しでも私たちの活動が伝わるようにお話しさせていただきますと思います。

先月9月10日に星野源さんのさいたまスーパーアリーナで行われた3万人ライブに行ってきました。そのライブのテーマがContinuesでした。星野源さんは、つながる、受け継ぐ、続いていくというような意味を込めて、テーマを決められたそうです。それを聞いて、究極のところ、私たちの活動はまさにContinuesであるなと思いました。

私は旧可美村である可美地区で社会福祉協議会の理事として可美地区に関わっています。縁あって平成13年から子育て支援の活動、平成14年からは健全育成や顔の見える地域を目指したサマーフェスタの取り組みをしてまいりました。それぞれ、かれこれ16~7年目になります。

今回はちょっとその活動も紹介しながら、いろんなことを考えていきたいと思いました。まず子育て支援の活動のことですけれども、当時連合自治会長さんが私の自宅にみえまして、可美地区は高齢者福祉の活動は盛んなんだけど、子育て支援の活動がないので、何か立ち上げてくれませんかという依頼でした。当時、浜松市ではなかよし館の取り組みがされ始めていました。本来は楽しいはずの子育てなのに、母親と赤ちゃんがずっと家にいて、息が詰まりそうになる。御主人は仕事で家庭のことに手が回らない。そういう中で赤ちゃんへの虐待がニュースで取りざたされるようなことがたびたびありました。

そこで今、何が、どういう活動が求められているのかを私たちは考えました。自分の子育てに感じる不安や睡眠不足のつらさなど、わかってくれる人がいない。つまりメンタル面でのフォローが足りない状況、また高学歴の母親が増えてきていて、子育ては楽しいけれども、自分のキャリアが生かされない。自己実現をしたいという素直な欲求、遠くからお嫁に来て友達がいなくて寂しいなどなど、お母さん方のニーズを想像しました。

そして2時間だけでも、託児をしている間にお母さんたちがリフレッシュしたり、エネルギーを充電したりする講座をやろうと決めました。学ぶことが心を豊かにし、メンタル面も鍛えられる。集まることで知り合いもできる。子供をあえて親から離すことで、講

座後は新たな気持ちで子供たちと向き合える。講座は年間9回程度ですが、料理、エアロビクス、小物作り、音楽など、多様なジャンルに加え、メンタル面を自分で振り返られるよう、心療内科の女医さんのお話や、心理テスト的な講座、「子育てとは」のような考える講座を必ず組み込みました。

また、お子さんの様子は日々変わるので、その都度募集をすることにしました。この活動はお母さんたちに受け入れられ、リフレッシュできて、子供と楽しく向き合えるという感想がたくさん聞かれました。

また、年間9回では寂しいので、もっと回数を増やしてほしいというお母さんたちからの声で、友達づくりの助けになる日として、サロンのなみんなで仲良しの日も取り組むことになりました。さらに、名称は「ぺあれんつ」として、子育ては両親でしてほしいという願いを込めました。

次に、サマーフェスタの取り組みですが、平成13年ごろ、夏休みに行われていた自治会主催の夏祭りや、社会福祉協議会主催のほいほいボランティアチャレンジデーというのをやっていたんですね、可美地区で。1つにしてお互いの力を融合した企画をしませんか、取りまとめは私が行いますという申し出を私がしまして、当時の自治会長さんや社会福祉協議会の方々께서了承してくださり、始まりました。

始まりは翌年の2002年からで、今年は16年目、東北の大震災で1回お休みしたので15回目でした。このフェスタは子供たちの健全な育ちの一助、また可美地区全員を対象にした祭りとして老若男女が集まり、お互いの顔が見える関係づくり、地域みんなが楽しめる一日とすることを目的としました。

特に中学生をボランティアとして募集をし、大人の中で一緒にお店をやったり、フェスタ自体の準備や片付けをしたりする。若い人たちの力に大人は助けられ、励まされる。中学生たちは感謝されることで自分を認められた実感を持てる。15回続いていますと、当時15歳の子が現在では30歳、0歳の赤ちゃんが15歳になっています。当時の中学生が、今ではフェスタの企画側に回り、赤ちゃんがフェスタを支える力持ちになっている。時の流れをしみじみ感じます。

このフェスタの細かな内容や子育て支援の内容については、今日お配りしましたチラシ、サマーフェスタの方は「可美だより」ですね、子育て支援の方は「月刊ぺあれんつ」というものをお配りしてありますので、そちらをご覧ください。また連絡先等もそちらにありますので、ホームページとかブログ等も、もしよかったらのぞいてみてください。

サマーフェスタの方は、今回も参加者や主催者側の実行委員や協力者合わせて約 3,000 人の方が関わっていただきました。可美地区人口が1万5,6千人ということから考えると、もちろん地区以外の方も関わってくださっていますが、楽しく充実した1日として、地域の中で喜ばれている活動になっていると思います。

さて、この2つの活動をかなりざっくりお話ししてきましたが、なぜ16~7年続いてきたのかを考えてみました。子育て支援の活動も、サマーフェスタも共通していることがあります。まずはスタッフ側の人選です。子育てサポートペあれんつの方は、託児するスタッフを地域の回覧で公募しました。すると、子供好きな元教員、保育士、民生委員を含む16名が集まりました。また講座の講師を地域内で探したり、自分たちスタッフが講師を務めたりすることもして、地域のマンパワーを高めました。

サマーフェスタは、子供会、中学校、小学校、幼稚園、保育園の各PTA、4町ある各町のお祭り関係者、郵便局や銀行などの金融関係、地元のスーパーや大きな商店、社会福祉協議会のボランティア団体、会場となる可美共同センターさん、また個人での参加は『可美だより』で広く公募しました。自治会の役員さんには入っていません。自治会長さんからは、自治会はお金は出すけど口は出さない、自由にやりなさいと言っていました。つまり子供の関係以外では、なるべく地域に広く公募し、役目ではない関わりの方に声をかけ、地域内のマンパワーを大事にしてきました。

2つ目の共通点は、あくまでもボランティア活動なので、活動を続けることを強制しないということです。子育て支援も、サマーフェスタも、1年ごとに自分の関わり方を振り返り、次年度続けるのか、休むのかを聞く機会を持っています。特にサマーフェスタは、先ほど挙げた方々に実行委員会に加わって協力していただけるのか、今年は見送るのかというアンケートを毎年取り、協力いただける方々で実行委員会を組織し、開催してきました。毎回40名から50名近くの方々に、小中学生から80歳くらいまでの異年齢の実行委員が集まる実行委員会となっています。

3つ目の共通点は、講座の受講者や祭りに遊びに来てくれる方々が楽しめるものにすることはもちろんなんですけれども、それを提供するこちら側が楽しい、自分が役に立ったと感じられることを大事にしていることです。そのためには、集まりの中で自分の意見を言えること、子育て支援の企画やサマーフェスタの実行委員会では、気軽に話せる雰囲気の中で自分の意見を言うし、みんなが真剣に聞きます。また、集まってきてくれた企画側の方々の持っている力を生かせるような役割分担には気を配っています。

そして最後の共通点は、信頼できる中核となるスタッフがいるということです。子育て支援の活動は、10年前から私がフルタイムで仕事を始めたため、講座の当日は参加はしていません。ほかのスタッフで当日を切り盛りしてもらっています。私は事前の講師との打ち合わせとか回覧等、情報提供の準備と、講座が終わってからは、スタッフさんに感想をまとめていただいて、自分がホームページやブログに上げるという役をしています。

サマーフェスタの方も、去年は当時用事があって参加できず、他の企画員さんで当日を担っていただきました。この16年間で、自分がいなくても回っていく活動となっています。

以上の4つの点から、この活動は続けてこられたと思っています。こうして活動を続けてきたからこそ、新しい人も加わりながら活動が続くし、続けていくことで次世代の人が続けていきたいという気持ちを持ってくれる。まさに Continues だと思ってしまうわけです。さっきの改めてライブのテーマでした。以上で私の活動の紹介を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 発言者3さん、それから発言者4さん、どうもありがとうございました。今資料を拝見していると、発言者3さん、それから発言者4さん、同い年なんですね。知っていました？（「高校の同級生です」）無茶苦茶優秀な高校ですね、どこですか。（「浜松西高です。ノーベル賞の天野さんと同級生です」）今、中高一貫ですよ。感心しました。

東海道の真ん中の中野町の発言者3さん、この中野町を考える会ということで、まずその中野町を何といいますか、東海道の中で真ん中に位置づけるという、そしてまた天竜川を渡った西側になりますから、浜松の玄関口と考えると、こういう位置づけはすごくわかりやすいですね。ですから浜松の東の玄関口はここですよという、そうすると玄関をどう整えるかというおのずと課題になりますし、そしてここが真ん中であるということは、東海道、東は江戸から西は京都、関西までですね、視野に入れることになるし、それからまた天竜川、それと東海道が交差しているところの水の道と陸の道を人流と物流のそういう観点でも考えることができるということで、非常に考える軸がしっかりしているということでありまして、そしてここをお花で、夏はヒマワリ、秋はコスモス、また春は菜の花で飾ろうと、これは非常に天竜川と、広やかな地域のイメージが目に見えようでありまして、それを町の人たちが一緒になって飾られているということで、これは本当に浜松市の誇りじゃないでしょうか。感心しました。

それから伊豆石の蔵ですか。これは木材を持って行って、彼が言ったとおりですけれど

も、伊豆石というのは御案内のように、各大名に徳川さんがお命じになって、江戸城をつくるために切った石であります。それを江戸城でつくって、したがって、その石場が今でも残っておりまして、伊豆半島にはたくさん。そうしたものを何か遺産群として登録したいという動きも伊豆半島にあります。その伊豆石がこちらに持ち帰られてきたと。それは木材を持っていった恐らく船底のバラストですね、重心を下げるために、そういうものとしても重要であり、かつそれを引き揚げて、そして今蔵として残っていると。

その蔵に40人、50人ぐらい入れるスペースがあって、そこに何と文芸大の演劇部が演劇しているということでどうもありがとうございます。それ以外にギャラリーに使ったりとか、そしてそれが地域の文化財として、恐らくこれは東区の区長さんが申請されたんじゃないかと。ともかく言うことが感心しましたというか、いいなど。

ですから子供たちに中野町の誇りを持たせる。目に見える形で歴史を現場に展示するというのをなさっておられて、昔そこで演劇もされていたということですから、これから非常にこの中野町学とでもいいでしょうか、郷土学のようなものを通して東海道を考えたり、あるいは天竜川の役割を考えたり、昔帆掛け船があったのに、なぜ今は水量がこんなに少ないのだろう。上でダムで取っているんだとか、大井川だって、相当奥の方まで、井川の方まで帆掛け船が行ったそうですが、今はそれがなくなっております。

しかし、写真が残っているということが往時を偲ぶことができるということで、こうしたことを通しまして日本の歴史を学ぶことができるということで、この中野町を考える会は素晴らしい試みだと、ただただ感心したということです。

発言者4さんはもっと感心しました。びっくりしました。もう言うことないということですね、というぐらいに感心しました。

子育てにつきまして、お母さんの立場に立って、お母様が高学歴ですし、いかにしてそのお母様の悩みをしっかりと分析して、それに応じる形でプログラムを立ち上げて、今日も赤ちゃんをお連れのお母さんがいらしていますけれども、そうしたお母様の立場で子育てを考えていくということでございますが、そしてサマーフェスタも16年も続けられて、やっているうちに子育てしていた若いお母様がベテランになられ、また小さな赤ちゃんが16年、17年になると物心ついて、何か自分もお手伝いしたいということで、老壮青という、まだ若いのでそうは言いませんけれども、世代がContinue、つながるといって、仕事がつながっているだけでなく、世代もきちっと継承されているということを感じまして、こういう市民というか、町の方がいるというのは、市としてはものすごい財産だというふう

に思う次第であります。

ですから、これはほかの町でも見習ってくださいというふうに言いたい、そういう中身ですね。そういうことで、浜松西高はすごいということです。単に天野先生だけじゃない。天野先生とあんまり変わらないじゃないですか。(「同級生です」)天野先生もあなたも。(「はい」)あの学年はすごかったんですね。だからですね、これは浜松北だけが中心じゃないということがますますわかってきて、私は実は文芸大の学長のときに、浜西高に参観に行きました。行って、そしたら高校生は試験中だったんですよ。中学生の2年生の授業を高校の先生がなさっておられたんです。

中に入りまして、それで授業を聞いていて、そしたら俳句の講義をしていたんですよ。松尾芭蕉の俳句をざっと並べて、高校の先生が書かれて、これが切れ字です、これが季語ですというふうなことを言われて、「この中でどの俳句が一番好き？」というふうに中学生に聞いたんです。中学生は俳句について学ぶのも初めて、芭蕉というのを聞いたのも初めて、切れ字を聞いたのも初めて、季語について聞いたのも初めてで、ぽかんとしているので、これはいかんなと思って、私手を挙げまして、「それで先生、僕『五月雨を集めて早し最上川』、これが大好きです」と言ったんですよ。

そしたら中学生みんなびっくりしましてね、そしたら先生も高校生の先生ですから、じゃああなただけですか、こういう者です、大学のということで、なぜそれがいいかと。あれは『五月雨を集めて早し最上川』というけど、あのときに芭蕉がもし天竜川のそばにいたら何と言うだろうと。『五月雨を集めて早し天竜川』と言ったに違いない。天竜川と最上川と、どちらが早く感じるか。それは最上川よりも天竜川の方がわあっという感じでしょうと。

それで、そのとおりで、最上川は山形県だけで完結しているんですよ。全体の流域が74%を覆っているんですね、山形県の。それを世界文化遺産にしようという動きがあったんです。私は天竜川を世界文化遺産にしてやろうと当時考えていたところがありまして、山は富士、川は天竜というふうに考えていたんですね。そういう試みもありまして、そういう話を子供たちにして、それを子供が真剣に聞いていたのを覚えております。だから浜松西高というのはすばらしい高校だと思ったら、私に挑戦する人も出てくるし、ですからいろんな人が出てきておもしろいです。

そして今日は可美を中心にこういうサマーフェスタを続けてこられて、そしてもう市長にもなってもらいたいぐらいの実力のある女性がいる。だから浜松には、きょう3人の女

性のお話をお聞きしましたけれども、浜松は職工さんの町ということで、何となく男衆のイメージが強かったんですけれども、花博をなさったり、音楽のいろんなことをなさったり、まちの飾りもなさったり、こういうまちづくりや、お年寄りのためや、さまざまなボランティア活動などをなさって、女性の力が実は男性を支えていたんだなということを改めて今実感をしているところで、男女共同参画は浜松でもう実現されているなというような感じもありまして、浜松万歳と言いたいですね。

大いにこれからも発言者3さん、それから発言者4さんもこの活動が継承されていって、そして浜松の誇りというふうに思いますし、うちの職員は感動して聞いていたと思いますよ。恐らくお二人もそうでしょう。言うことないというような顔をして聞いておられました。どうだ、聞いたか、これを聞かせたかったというような、そういえばこの方たちを紹介されたのが、この区長さんですよ。あつなるほど、意味がわかりました。どうもありがとうございました。

【発言者5】 こんにちは。ただいま御紹介いただきました浜松市東区豊西町で温室メロンを栽培しております発言者5と申します。よろしくお願ひします。

実は今日出がけに妻に、「今日は県知事と語る会があるから、お父さん、間違ってもうけねらいやだじゃれを言ってくるな」と、妻に命令されてきましたので、どこの家も一緒だと思いますが、妻の言うことは絶対ですので、今日は多少堅い話になってしまうかもしれませんが、よろしくお願ひしたいと思います。

実は私が住んでいる豊西町というのは天竜川の右岸、かささぎ大橋という橋がかかっているんですが、その橋の付け根というか、浜松側が豊西町という地域になっております。また、東区は大変施設園芸の盛んな地域で、天竜川の扇状帯というか、平らな部分が多く、また水源もしっかりしているということで、特に葉ネギ、セロリ、青梗菜等、本当に全国で1、2の特産物を出している地域でございます。そういう東区の中で、うちの父が昭和30年代の多分半ばだと思うんですが、父に聞いたら、よくわかんねえと言われたものですから、何年創業ということは言えませんが、30年代の半ばにメロンをつくり始めました。周りにメロン農家が多かったので、うちの父もこれはいいということでつくったと思います。

なぜメロン農家がたくさんあるかといいますと、施設園芸というのは皆さん御存じだと思いますが、少ない面積で売り上げを高く上げることができる、そういうことが可能な農

業でございます。そのかわり多少資本金等、技術等も要りますが、やはり少ない面積でたくさん売上げ、もしくは収入を上げるということになりますと、どうしてもこのような施設園芸が盛んな地域になっていったんじゃないかとそう思っております。

その中で私も中学3年の高校の進路を決めるときに、メロン農家の長男だから、農業高校へ行ってメロンでもつくろうかなと、その辺の簡単な気持ちで高校に進み、高校3年間、実にエンジョイし過ぎて、行くところもなくなって、やっぱりメロン農家に就農という形で自宅に入りました。本当に今考えますと、今私こう見えても59歳でございますので、18から入っていますので41年間、明けても暮れてもメロン、周年でつくっておりますので、1年間ずっとメロンを41年間、繰り返してやっているわけなんです。

なぜこのようにメロンを40年も、また父の代からだ五十何年、60年近くメロンでやっていけたかなと思いますと、実は私、静岡県温室農協というメロン専門の組合に父の代から加入しております、そこでメロンをつくったものは、その農協を通して、東京、大阪、大手市場へ販売しているわけでございます。その温室組合の御加護というか、そういう団体の中に入っていることによって、60年の間メロンをつくっていったなと思っております。

確かに今日お話しする中で、失敗や成功の話をしていただければということをおっしゃっていただくんですが、大きな失敗とか、いいことも悪いこともたくさんありますが、俗に言う大儲けはできなかったけど、小儲けで3人の子供に恵まれまして、今は孫もできまして、何とか41年間やってこれたなと、そういうふうに感じております。

そこでちょっと豆知識で、皆さんに聞いていただきたいなと、ちょうど南区の区長様もいらっしゃいますので、聞いていただきたいなと思っておりますが、実は温室メロン発祥、初めてメロンをつくったというのが、これ意外なことなんですが大正6年、1917年に今の芳川町という、あの当時でいいますと芳川村という、そこでミワノさんという方が東京から種をもらってきて、簡易な温室ではございますが、そこで初めてメロンをつくったわけなんです。これが多分恐らくわかっている限りでは、メロンを一番最初というか、ある程度商品化してつくった最初の場所と最初の人ではないかと。そのようにちゃんと私たち組合の歴史書の方には載っておりますので、間違いないと思っております。

その2年後ですが、またその芳川地区でツモリ温室組合という、その時代、大正9年に温室組合というメロン農家がつくった組合が発足して、メロンを全国に売ろうというような形になっております。それからだんだん各地にそういう温室組合とメロン栽培が盛んになっていき、当然浜松も私たちの東区、また浜北と、あと西の方もどんどんつくって、

それがだんだん磐田、袋井、掛川というふうに通へ通へと流れていって、その組合が合併をいたしまして、昭和 40 年代に現在の静岡県温室農協という組合組織がしっかりできました。

このタイトルにもあるように、アローメロンという話になっておりますが、実はそのアローメロンというのは、もう 1 つ袋井の方を中心にクラウンメロンという同じようなブランドがあるんですが、これ皆さん別物だと考えていると思いますが、実はこれは温室農協でブランド名が不思議なことに 2 つあるんですよ。

袋井地区、掛川も入っています、磐田も多少入っていますが、その地区でつくったクラウンメロン支所というところに出荷している人たちがクラウンメロンという名前を出して、またその他のものが、磐田も浜松も掛川も御前崎の方もそうなんです、つくっている方がアローメロンという形で、ブランド名は違うんですが、温室農協の組合員ということには変わりなくて、私たちもそちらの人たちと交流も当然ありますし、高校の同級生もクラウンメロンとかアローメロンの同級生もたくさんいらっやして、そのような形で温室組合のブランド名だと、そういうふうに通っていたら幸いだなと、そう思っております。

そこで、メロンの販売のエピソードなどをちょっと御紹介させていただきたいと思っておりますが、実は私 2011 年に温室農協の販売担当をやらさせていただきました、東京、大阪の市場にメロンを送ったり、その他もろもろの担当者ということで、責任を持ってやっていたことがあるんですが、そのときに 2011 年のふじのくに農芸品フェアという当時の県のマーケティング課ですか、マーケティング室というか、その方たちが主になって 2011 年は香港のそごうデパートの地下でふじのくに農芸品フェアをやるということで、地元の温室組合の方、ちょっと試食宣伝会に行ってくれということで、販売担当でございましたので、部下と 2 人で飛行機に乗って香港にメロンを持って行って試食宣伝を、香港の人たちに宣伝をしてきたわけでございます。

その中で、実際は浜松でとか、静岡とか、東京でもそうなんです、やるときには、メロンを 34 等分とか、64 等分とか、そういうふうに通って、皮の方を残すわけですね。残してお盆に載せて「どうぞ」と試食をやるわけですが、なぜかといいますと、実は温室農協のメロンというのは、特徴として皮の付近まで、皮じゃないですよ、皮の付近までおいしく食べれるということと、その編み目を皆さんに試食であろうと、ちょっとでも見ていただきたいということと、実際は手間を省くということも多少はあるんですが、そういうこ

とで試食宣伝会では皮を残して試食をやったわけです。

香港で同じように皮を残してやったときに、私、英語はあまり得意でなく、全然無理なものですから、知っている片言の英語で「プリーズ、プリーズ」と勧めたり、食べた方に「グッド？」聞くと、にこっと笑ってくれたりして、何とかおいしく食べていただいているんだと、そのように感じて試食宣伝会をやったときに、そのときにある向こうの香港の方なんです、皮から食べちゃったんですね、一口ぱくんと。皮さら食べたので、当然「グッド？」と聞こうと思ったら、「バッド」というような感じで言われまして、いやあ、これは参ったなと思ったら、またしばらくたったら、皮さら食べる人がいるわけなんです。

ああっと思って、一緒に行った部下と話をしたら、どうもこちらの人は文化が違うから、メロンは皮さら食べるものだと勘違いしているんじゃないかと、そんなようなことを思いまして、すぐに皮をはいで、身だけでお盆に載せて試食提供をさせていただきました。

おかげさまで静岡のメロンはおいしいと、本当に静岡のメロンはおいしい、おいしいということで、飛ぶようにとまでは言いませんが、ぼちぼち売れました。本当にそのときは香港へ行ったときに、やはり文化の違いというのは大きいなということを感じました。

その中で実は今日知事もみえておりますが、この時から今まで海外へ日本から宣伝に売って出たわけなんです、御存知のとおり、2019年袋井エコパでワールドカップ、ラグビーの世界大会があります。また2020年東京オリンピックのときに、伊豆のサイクルスポーツセンターで自転車競技が静岡県で行われるということを知っております。今まで売って出たメロンの宣伝を今度は世界から静岡にやってきていただくと、またキャンプ地として一月ぐらいいていただくということになれば、こんなカモが来てくれるようなもので、こういう言い方は失礼なんです、ここにも宣伝をしない手はないだろうと、私はそう考えております。ぜひこのチャンスをうまく利用して、静岡のメロン、のみならず静岡の農産物、また浜松の農産物を世界にアピールをするいい機会だと思っておりますので、ぜひよろしくお願ひしたいと、そう思っております。

その中には多少、今ちょっと法的な問題もございまして、GAPとか、しずおか認証とか、いろいろ今世界に通じる野菜をつくらなくてはいけないということは当然ありますが、その部分も含めまして、私たち農家が何とか地産地消で静岡の野菜を食べていただいて、おいしい、おいしい、これからも海外へ輸出できるような野菜、果物になっていただきたいなど、そう思っておりますので、ぜひその辺をよろしくお願ひしたいと、そう考えております。

ちょっと時間の都合もございますので、簡単に話をさせていただきたいと思いますが、やはり農業が今ちょっと衰退気味になっております。ちょっとというか、かなり右肩下がりの部分もございますが、何をやれば右肩上がりになるかということは、いろいろ問題と
いうか、たくさん問題はございます。

その中で1つ、ちょっとだけ私がこのごろ感じたことがあるんですが、それは皆さんも聞いていただきたいと思いますが、やはり行政というのは人の顔を見てやっていただきたいなど。そのためには私、農林事務所という県の組織がございますが、その組織が、皆さんちょっと専門分野になってしましますが、農業関係の普及所と昔言っていたところなんです
が、県下に7つあります。

静岡県は広い地域ではございますので、やはりその分野分野で地域地域に合った農業指導、農業行政をしていくためにも、そういう農林事務所をうまく活用して、また地域の皆さんの声を農林事務所を通して行政にぶつけて、またその行政がそれに対しての回答を農林事務所を通すというような地域密着型が、農業をするにもいいんじゃないかなと、そのように感じておりますので、私が最近メロン農家として農業をやっていく上で、これも1つの農業発展の礎になるのではないかと御提案をさせていただきたいと、そう思っております。

言い出すとたくさんありますし、女房にうけねらいは言うなということを言われておりますので、大変簡単ではございますが、これで終わらせていただきたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。

【発言者6】 浜松市の南区でベストブラスという会社を経営しております発言者6とい
います。今日は皆さん、地域のことですとか、メロンのお話ですとか、割と馴染みがあるような話題ですばらしいなと思えました。僕は南区で楽器のトランペット本体、それからマウスピース、ミュートという音を変換したりするようなものなんですけれども、そういうものを企画、設計、製造、販売をしております。

実は今トランペット楽器の設計から部品製造から組み立てまで、一貫して全部できるというのは日本で2社しかありません。1つはヤマハで、もう1つはうちのベストブラス、もうそれしかないんですけれども、うちはどちらかという大量生産ではなくて、世界中の一般的なトランペットとは全く違う構造を取り入れて、ほかと一線を画す高い性能を誇る楽器をつくる。それはもちろんですけれども、それとともにトランペット界のフェラー

りを目指して、海外での展示会に積極的に参加し、ブランド力の向上を目指して活動しております。

フェラーリと言ったんですけれども、もちろんポルシェでもいいんですが、そんな中で、ことしの1月に楽器のまち浜松をPRするというので、ユネスコの文化創造都市に登録されたということで、浜松市が3年事業を興しております、その事業に協力させていただいて、アメリカのアナハイムという都市で開催されていた非常に大きな楽器の見本市にも参加いたしました。3か月後の1月には、また今度は2年目の展示会が控えているんですけれども、撒いた種をしっかりと育てて3年目の収穫につなげられるように、去年とはまた違ったアプローチで行きたいと思っています。

僕、今日一番若いかなと思うんですけれども、今33なんです。27のときに創業者の父から引き継いで社長になりました。会社に入ってから3年しかたっていない中で、突然だったんですけれども、父である社長から、割と軽い乗りで、いいよという形で引き受けてしまったんですけれども、そんな父はヤマハで約20年間、金管楽器の設計者としてやってきました。今は社長を譲ったんですけれども、現役で設計は大好きなので、設計ばかりやっています。

僕が社長になったときに、その父と同じ道を歩んだら、大きな木に隠れてしまうことになるので、私自身としては会社のブランド力向上とか、海外への進出に力を入れようと決めて、いろいろな活動をしたんです。特に海外の展示会はいろいろ行きまして、だれも何も助けてくれないし、父も何も助けてくれないし、ただ人脈も何もなかったんですけれども、一人で行って、もう全部体験学習していきました。

それで今、社長になって7年目なんですけれども、今では世界30か国で弊社の製品にお声をかけていただけるまでになりました。自分の力のなさを感じることも多いんですけれども、地位は人をつくるというように、社長の仕事というのは、社長にならないと考えもしないようなことばかりだと思っています。もし今日この会場の中で将来的に継がせる人が決まっているという方がいらっしゃれば、早く任せてみるのも1つの選択肢じゃないかと思います。

僕の場合には、せつかく長い人生を賭けるならば、このブランドがトランペット界のフェラーリくらいにならないと割に合わないと思いました。若い根拠のない自信があればこそだし、社長の期間が短ければ短いほど、現実的な攻めになってしまいそうな、そんな気がします。もちろん上の方からすると、全然違うことをやるので心配もあると思うのです

けれども、僕ら若い世代も、自分の会社をよくしたいというのは当然思っていて、少しだけ信じてもらえればと、せつかくこういう場なので、若者の気持ちを少し代弁させていただきました。

ところで、今日は平太さんと語ろうという会なので、会社の方はこれぐらいにして、僕は前々からこの「ふじのくに」というビジョンと響きは非常に格好いいと思っております。特に僕らのような産業分野においては、これから間違いなく地方が輝く時代だと思いますし、個人的には浜松や静岡は1年中雪も少ないし、車社会なので、日本のロサンゼルスと言えるような魅力あふれる地域だなと思っています。

最近見たCMで、コーヒーのCMですけれども、会議に来ない部下に上司がテレビ電話をかけるんですけれども、何で会社に来ないんだと言うと、その部下が何で行けなさいいけないんですかと、もちろん作業はやりますよというやりとりをするCMがあるんですけれども、確かに人が会社や都心にいる必要性は以前に比べて格段に少ないと思います。簡単なコミュニケーションや情報発信はどこでもできますし、買い物はボタン1つでドローンが持ってくるというのも、現実には始まっています。

地方に住むデメリットよりもメリットだらけの将来が来ると思いますし、みんなが住みたいし、住む人みんなが誇りを持つような「ふじのくに」が実現すれば、おのずと暮らしは豊かになって、最高のトランペットが欲しいなというような考えも、もっともっと出てくるんじゃないかなと思います。

そうならば僕的にも願ったりかなったりですから、これからも「ふじのくに」ブランド力を高める一商品として、我々ベストプラス初め、県西部の楽器産業を紹介していただけるように、今後ますます努力していきたいと思っております。川勝さん、これからも頑張ってください。以上です。

【川勝知事】 東区の発言者5さん、南区の発言者6さん、ありがとうございます。両方とも人を幸せにすることに関わっておられるわけですね。メロンをいただけたら、誠においしくて幸せになるし、すばらしい楽器の音色を聞けば、心が豊かになるわけです。さらに、お二人に共通していることは、お父上をととても尊敬されているということで、お父上も自慢の息子さんということじゃないかと思ひまして、親子関係の絆を今話を聞きながら感じた次第でございます。

発言者5さん、1917年、大正6年にミワノヒガシという人がこちらで温室メロンを始め

たと。今 2017 年ですからちょうど 100 年ということで、その節目にミスターメロンの発言者 5 さんにお目にかかって大変光栄でございます。発言者 5 さんだけで 41 年、お父上も入れると、もう半世紀を優に超えるメロンづくりということでございまして、しかもアローマもクラウンメロンも、実はブランド名で地域が違うだけで同じものだという事を知らない人も多いと思いますけれども、改めて同じものなんだということで、そして最高級の農業芸術品、縮めて農芸品ということであるということでございまして、そしてこれを香港で我々が一緒に売り込んでいくときに、この網の目、実はその前年は、たしか韓国のソウルのロッテの食品街でメロンを出した。そうすると、向こうも日本の真似をされてメロンをつくられているんですが、この網が違うんです。もうそれは網の目がものすごく荒いんですね。こちらはもう本当に細かいということで、値段がゼロが 1 つか 2 つこちらの方が高がついた。それから売れていくんですね。ロッテに買いに来られる韓国の方というのは裕福な方が多いので、ですから味も違うということで、これは農業芸術品であると。

日本の農業は園芸じゃないでしょうか。浜松は特に園芸農業と言っていると思いますが、『園芸』という雑誌があります。『園芸』というのは庭づくりですね。だから庭をつくるように、本当に丁寧に品種改良をし、土壌改良をし、作物がどのようにすると美しく、おいしく、形もよくできるかということに腐心せられて、そしてでき上がっている、そうしたものが静岡県の農産物で、そして静岡県がこれから海外に売り出していこうと思っている代表的なものが、お茶と並んでこのメロンであります。

ですから今、発言者 5 さんの方からオリンピック・パラリンピック、さらにワールドカップがエコパでございますので、ですからそのときにこれを契機にしてしっかり売り込めと言われて、これは実は一緒にやることになっていて、特段これを要請と受け止めませんで、おおっ、どうしていくかと、こういう感じであります。

それから、ちゃんと今日は来ておるんです。西部農林事務所の所長でございます。ともかくメロンのためになることは、実は静岡県のためになることなので、ですからもう徹底的に応援してください。これは方針として決めてあるんですよ。経済産業部長をしていたときの知事戦略監が決めたんです。ですから戦略監もこれについてやりますので、これでトライアングルができましたね。

それから G A P というふうに発言者 5 さん、専門用語を使われました。これは農作物の品質を保証する国際規格の認証のことなんですが、グッドの G と、アグリカルチャーの A と、それから G A P の P はプラクティスということですね。きちっとした、立派な、安全

な食品だということを示すもので、我々静岡県も、森林にしてもそうですし、こういう農産物にしてもそう、食材についてもそうでございますが、きちっとした安全基準をクリアして、国際的な水準をマスターしたものの、これを売り込むということですから、もうこれは内外の方たちに堂々と売ってまいりたいと、そういうことであります。

それから発言者6さん、社長でもう7年目ということで、もう本当にすがすがしいというか、さわやかというか、フェラーリで飛ばすような、そういう青年社長でございます、売り上げも順調に伸び、そしてまたこの地域でヤマハの名前、これを世界に知らしめたのは父親のようなそういう技術者が、設計者が、頭脳があったからでありまして、そしてヤマハもカワイもピアノで有名ではありますけれども、実際はブラスといいますが管楽器ですね、これがやはりものすごくいいものをつくると。ですから弦楽器とかピアノになりますと、弦楽器ですと、ストラディバリだとか、ガルネリだとか、これはもう残念ながらなかなか追いつきません。しかし、ヤマハ、あるいはカワイはスタイナーというところにも相並ぶところまで来ました。

ですから今度はこのトランペットなどを軸にした管楽器ですね、これでもって地域の、ヤマハの名前を発言者6さんを媒体にして売って出たい。ですから、いよいよ国際クラスにお父上の設計された楽器を売っていくのが子供の使命ということになりまして、やはり若いうちに海外に行かないと、英語などもできません。

やはり耳がなかなか発達しないと、相手の言っていることがわからないので、ですから言っていることがわかれば、無口な人もしゃべれる人もいます。無口な人は、向こうが何か言っているても、なるほど、それで終わりでしょう。しゃべれる人はばあっとしゃべりますね。だけど、相手が何を言っているかわからないと、本当に笑っている以外にないんですよ。あるいは眠る以外にないんですね。サイレント、それからスマイル、スリープ、これが日本の3Sと言われたんです。

若いときは出ていくと、もう本当にシャープで、耳が鍛えられまして、そして言いたいことは適当に、自分が内容さえあれば下手な英語でもいいわけです。耳が鍛えられないといけない。だから若いときに行かなくちゃいけない。ですからもうやれということですね。30にして立つというじゃないかと。27でしょう。27は四捨五入すれば30です。30にして立つというわけですね。だから30で、もう20代の後半で、四捨五入すれば30だから、30にして立つ、40 惑わず、50 天命を知る。50 になったら遅い、あきらめる。

要するに自分の仕事を天命として、例えば発言者5さんの父上はメロン一筋、そしてそ

れを引き継がれて発言者5さんもメロン一筋ということで、両方とも世界に売って出るといことになりまして、いよいよ静岡県の富士となれば、何と云って、これはもう知らない人がいません。

ですから、富士山が世界文化遺産になったのが平成25年の6月のことでした。それから南アルプスがエコパークになり、また食材がこちらにはたくさんございます。浜松は日本の中で一番自治体としてたくさん食材を持っているところじゃないかと思えますね。食材の王国であります。また静岡県は、そのおかげを被りまして439もの食材がありまして、食材の王国です。そのうち農産物が399ありまして、その農産物のすべてに人の手が入っております。長年の品種改良、これをやってこられたので、すべて農芸品で、いよいよ食の都、これをつくっていかなくちゃいけないと。その食の都のところに音楽が奏でられていると、ものすごくぜいたくになります。景色がきれいだともっとぜいたくになります。そして、うちは空港もあり、港もある、新幹線もある、高速道路もあると、こういうわけで、いよいよふじのくにが世界の檜舞台に立つというときが来ております。

皆さんのお手元にいつているかどうかは知りませんが、平成25年の6月から、今平成29年の10月ですけれども、平成25年6月から数えるとちょうど53か月後になります。53か月たつて、天野浩先生のノーベル賞などのような世界クラスのトップ、金メダル、銀メダル、銅メダルを取られた人も含めてですけれども、平成25年6月から今日まで59件の世界クラスの認証が静岡県に下りてきています。

ですから文字どおり我々は世界の檜舞台ですね。ですから発言者5さんがメロンをしっかりと売るのにちゃんとしろと、一緒にやろうと。それからまた発言者6さんが楽器について、フェラーリのようにちゃんとブランド名を確立するんだと言われているのは、十分に理由のあることで、それができる環境がもうあります。ですからもう東京とか名古屋が相手ではありません。うちを世界が相手にする時代が来ていると、こういう考えでもってやっていきたいと。

そういうことをするのに、ちょうど発言者3、発言者4コンビがあるように、皆さん同じ年ぐらい、ちょうど発言者6さんも同じ年、30代の前半で多くの社長が誕生して、今の社長さんは皆会長に退かれて、そして若手を育てるといいうそういう発言者6流の、これは発言者6流と言ってもいいと思いますが、浜松が長く続ける発言者6流というわけで、そういう発言者6流でやっていけないかと。私はもうこういうのは大好きです。

それでデザインなんかについて関心を持っている青年が静岡文化芸術大学にいます。静

岡文化芸術大学、これは中区ではございますけれども、そこに文化政策学部とデザイン学部がありますが、デザイン学部の倍率は10倍近いですよ。10年前は11倍だった。しかし静岡県から来る人が8割だったんです。今は北は北海道から南は沖縄まで全国区です。半分以上が全国から来ています。しかも倍率が高い。そういう生徒たちが来ていろんなデザインを考えている。

だからメロンをどのようにおいしく見せて出すかということが大事で、京都なんか過剰包装だけでやっているわけでしょう。うちは味で勝負している。向こうは過剰包装で勝負している。だから過剰包装は、それは1つのデザインなんですよ。だからうまいからうまいものは当たり前だというより、おいしくいただけるように出すと。

メロンをお箸で食べる人はちょっとまずいと思いませんか。やっぱりフォークとか、メロンの食べ方ってあるじゃないでしょうか。かぶりつくのもうまいですけども、やっぱりケーキをお箸で食べると、何となくまずいのじゃないでしょうか。ですからそういう出し方もあると思うんですよ。こういう出し方も考えながら、全部をトータルにデザインして行って、こういう花の町にしていこうと。花の数も静岡県だけで700品目あります。

今日はこういう花がありますが、ガーベラだとか日本一ですからね。ですから、そういうたくさんのお花に飾られて、そして心にも花が咲いて、そしておいしいものを食べて、本当に嫌なことを忘れるというか、人生のリフレッシュができる地域というふういうふうに浜松がなってくざると、富士山も喜ぶと思いますし、山は富士、水は浜松日本一というふうに言いますね。文字どおりそういうところでございます。

私はさっきの天竜を本当に世界遺産にしようと思ってやっていたんですけども、その運動を皆さん起こしてくださらないので、と同時に天竜川は長野県から来るので、長野県と一緒にやらなくちゃいけないと。それがまた面倒になりましてね、放ってあるんですけども、いずれ長野県がうちの後背地になってくると、ちなみに山梨県はうちの真似をしまして、ふじのくにを名乗るようになりました。

国民文化祭というのを、今国体があるでしょう、あれは体育ですね、文化祭というのを47都道府県順番でやっています。数年前、山梨県で「富士の国山梨県国民文化祭」としてやっている。あなたのところは甲斐の国じゃないんですかと言ったら、甲斐の国はもう武田の時代で終わったと。甲斐の国と言ったってだれもわからないわけです、どこか。だから富士の国というのわかるというわけで、ただうちと違って漢字で書いてありました。我々はひらがなで書いていた。レベルが違うとか言われて、本当に申しわけないけど、ふりが

なを振ってくれないかと、一緒にできるでしょう。

それから富士山の日というのを2月23日に平成21年の12月議会で決めたんです。それをまた真似して翌年2月23日です。これは浜名湖で水泳をやられました皇太子殿下のお誕生日ですね、富士山が大好きな、もし今上陛下が退かれれば天皇陛下になられる方ですが、富士山が大好きということで、国民の統合の象徴も、国土の統合の象徴も、全部静岡県にあるんですね。ここは日本の中心だというふうに思うことが大事ですね。そして自信を持つことが大事です。

そして、そういうやрмаいか精神を、特に静岡の中で浜松に横溢していると思いました。きょうは東区と南区の3人の方々からお話を聞きまして、それを実感しているところでありまして、それを皆様方と共有できたのを大変喜んでおります。きょうは発言者5さん、それから発言者6さん、すばらしい発表をありがとうございました。

【傍聴者1】 私、東区の傍聴者1と申します。今日とってもすばらしい皆さんのお話をお伺いできて、とてもうれしく思います。

そして今ちょっと川勝知事がおっしゃっていた天竜川から浜松、それから静岡県にかけて、何かすばらしい遺産を世界中に発信することができたらということで、何か長野県とちょっとなかなか結びつきがないように思われてお話があったんですけども、実は飯田の南信州と天竜川を通りまして、静岡県浜松が非常に結びつきが強くて、今ちょっと南信州交流センターの室長が東京から、来月三遠地区の物産展が浜松で開かれますので、そのときにこちらの方に来て、実は明治の最初に浜松医学校をつくった信州飯田出身の医学者の太田用成さん、それと明治の日本に進化論を広めました丘浅次郎さんの業績を顕彰するというので、今度東京で来年の4月15日から2週間ぐらい一緒になって展示会をやる、東京の本郷でやるという計画がありますので、順天堂大学などが多分協力してくださると思いますので、その辺のところの話を私今日川勝知事のところにお知らせしたくて、お手紙を持ってきたので、また後で帰りにお渡ししたいと思います。

本当にとっても今日皆さんのお話をお聞きすることができて、すばらしい会になって本当にうれしく思います。ありがとうございました。